

岡西惟中と林家の学問

陳 可 冉

要旨 南源性派への手札（『白水郎子紀行』所収）の中で、惟中は自分のことを「假儒」と称している。彼のいうところによれば、若い時江戸で菊池耕斎と檜川半融軒（経歴未詳）に従って儒を学んだことがあるという。その遊学の詳細については、定かなことは分らないが、耕斎は羅山門の儒者であり、惟中は羅山の孫弟子にも教えられることになる。

直門の師承ではないが、惟中は著述の随所において林家の学を受け継ぐ姿勢を示している。彼の著わした『徒然草直解』、『真字徒然草』には、羅山の『野槎』は勿論のこと、『羅山林先生文集』、『本朝神社考』、『林鷲峰の『日本国事跡考』』、『林読耕斎の『本朝遼史』』、『林梅洞の『史館茗話』』など、林家三代の著作が揃って引用されている。これほど林家の学問を信奉した例は、近世文学全般への林家の影響の大きさをさし引いても、やはり突出していると言えよう。

一方、惟中作の随筆『統無名抄』、『一時随筆』には和漢にわたる林家の学問、或いは林家経由の中国詩学の知識をそのまま受け売りする箇所が多い。その際出典を明記せずに、全くの剽窃と思われる場合すらある。しかし諸芸に通暁する惟中は、林家の学識をいくぶん敷衍して、それに自分なりの知見を加え、最終的には歌論なり、俳論なり、和漢比較文学論なり、興味深い一家の言に仕上げた条も少なくない。本稿では林家の学問との関係を視座に「記誦詞章の学」に由来する惟中の文業の一面を明らかにしたい。

はじめに

岡西惟中といえは談林随一の論客としてよく知られているが、俳諧以外に彼は漢詩、和歌、連歌、書道の諸芸にも精通し、当代有数の教養人でもあった。上野洋三氏は惟中著『白水郎子紀行』（天和三年（一六八三）序刊）の記述に大淀三千風と芭蕉の面影も感じられ、自ら明白な記録を残した惟中のことを「元禄文壇の典型的人物」と論じられている¹⁾。かくの如く多才で、しかも典型性をもつ人物であるが、彼の文業を支える教養の基盤には一体どのようなものがあつたのか。本稿では俳論、紀行文、古典注釈、随筆といった多岐にわたる惟中の著述を俎上に載せ、彼と林羅山をはじめとする林家の学問との関係について考察してみたい。

一

『白水郎子紀行』巻一に天徳山南源大和尚（南源性派）に呈した惟中の手札²⁾が収められている。時に天和二年（一六八二）の春、惟中は四十四歳であつた。

一時軒^{惟中}恭稽^{シテス}首^啓

天徳山南源大和尚竹椅下^一。拙爲^三巴西假儒^一。寓^三止于當邦坂上^一。寒暑五遷。旦業^ニ讀耕^一、暮事^ニ翰墨^一。爲^二童蒙^ノ之師^一。不^レ傳^レ道^ヲ。不^レ解^レ惑^ヲ。記誦詞章^ノ之學^ヲ也。…

天和年間といえ、惟中が次第に俳壇の第一線から退きかける頃ではあるが、まだ俳諧を本業としていた時期である^③。相手の南源性派は隠元禪師とともに明から渡来した黄檗僧であり、唐土の人にも分かりやすい職業名を心掛けたためか、俳諧師である惟中は自分のことを「假儒」と称した。

「儒」の定義について、江戸時代の知識人にとつて最も身近な書物の一つである『古文真宝』の注解に、「儒とは儒釈道と云る時は三つなれども、学問をして道を明むるを儒と云也」とある。それによれば、「道を明」らかにするために学問をする人は真の儒者である。対して「假儒」の惟中は道を伝えず、惑いも解けない「童蒙の師」のレベルに過ぎないと自覚している。その言が心底からのものではないにしても自ら「儒」と名乗った以上、惟中には学問を嗜んだことへの自負もあつたに違いない。

本人も明言した通り、彼の学問はいわゆる「記誦詞章の学」（經典を暗誦し、詩文を巧に修辭する学問）である。惟中著『続無名抄』（延宝八年（一六八〇）刊）巻上・第一条「平等院建立の事」の書き出しはこうである。「学文にころさしあるものは、詩一絶、哥一首にても、心をとめて記臆すへき事也^⑤」。学問の研鑽にあたり、何より躬行しなければならぬのは古典の暗記であると彼は考えた。さて、そのような「記誦詞章の学」と俳諧の創作とはどういう関係にあるか、まず惟中の俳諧観を押さえておこう。

た、言葉をかさり、はなをさかせ、古事ものかたりをもあらぬ事に引たかへる繹案すると、寓言のうそをつくと、これふたつを本意としるへし。

『俳諧彙求』（延宝三年（一六七五）刊）巻下の一節であるが、惟中は俳諧の本質を論じて故事や物語を踏まえたう

えで、そこから「あらぬ事」と「寓言のうそ」を作り、言葉をもてあそぶことこそ本當の俳諧であると力説する。要するに、手法は翻案と寓言の二つに限り、素材は古典に求めるべきであるという。惟中は明らかに古典の教養を俳諧の創作基盤に据えているのである。そのような態度は次の条（同書巻下）でも鮮明に打ち出されているが、長文なるゆえ、適宜省略しつつ引用する。

なにかしか書るものに、京極黄門の哥のよみかたに源氏、さころも見ざらん哥人をそしり、詠哥の大概にも古今集、伊勢もの語、後撰、拾遺をまなぶへし。又白氏文集第一第二の帙常にもてあそふへしともあそはしたり。又三史、五經、文選をまなふへしと女の哥仙たに云り。いまの俳諧はばざらごと、のみこゝろへてするにより、あるは連哥しのそしりにあひ、あるは哥よみのにくみにあへる事也。これ俳諧師の學文せぬ故也。…又千載集の序にから國日の本のひろき文のみちをもまなはず、しかのその驚のねのふかきみのりを悟るにしもあらず。たゝかなの四十字あまり七文字のうちを出すと書る。…この無才の人をもみちに引入んとするの階梯也。哥も連歌も俳諧も、才智なく文盲にしてなんぞ堪能の名を得、上手とも人によはれんや。

『源氏物語』をはじめ『古今和歌集』、『伊勢物語』、『白氏文集』、三史、五經、『文選』など、必読書の数々が延々と羅列されている。それはつまり、俳諧を作ることに必要な和漢の学識は和歌と連歌のそれに比べて少しも劣らない、無学の人は俳諧が作れないということだろう。無論、そのような考え方は何も惟中一己の創見とは言えまい。⁽⁸⁾ もそも彼が「なにかしか書るものに」と最初から断つたように、右に掲げた文章はほぼすべて池田是誰著『玉櫛笥』（寛文二年（一六六二）刊『初本結』巻八）の写しであり、惟中の発言は結局貞門の主張をそのまま踏襲していたに

過ぎない。⁽⁹⁾

無学を斥ける、教養主義ともいふべき古典重視の姿勢は、惟中の俳風を決定づける大きな要素の一つである。枚挙に遑がないが、「記誦詞章の学」を實踐した彼の努力が俳諧の創作に役立った例として、『白水郎子紀行』卷二の一箇所を示すと、

林昌亭興行。新宅あるを風飾、ちりを月に掃ふ。

瓦新し都府樓の月よりもなを

都府樓 纒見瓦色、観音寺 只聴 鐘聲とあるを翻案したる也。観音寺むらの名はいさゝかかなふべからむ

もおかし。

惟中は観音寺村という地元の地名から菅原道真「不出門」(『和漢朗詠集』所収)の一聯を思い出し、招いてくれた主人への風流な挨拶として漢詩の表現を新築祝いの発句に換骨したのである。前述した彼の俳諧観からすれば素材にしても、手法にしても、まさに手本たるべき一句であろう。

二

古典の熟読や詞章を暗記する以外に、もう一つ惟中が大事だと考えたのは識字のことである。彼は天和三年(一六八三)刊『一時随筆』・「林道春那波道円咄しの事」の中で、「すべて字をしらずしては、学文にうとし」とし

て、「すべてなにの書にも、うみてさしをき、しづかなるころは、字書を開てみる事、第一の学文なりと」^⑩重ねて漢字一つ一つの意味を知ることの重要性を強調している。それを説明するために惟中は和刻本『鶴林玉露』（慶安元年〔二六四八〕刊）地集・巻五にある「識字」の一節も引用したが、何よりも結論を導く前置きとしてこの条のタイトルにもなっている、林羅山と那波活所の逸話が挿入されたことは興味深い。

いつのとし、いつの日の事にか有けん。那波道円閑窓のもとに漢書を開て見給ふころ、林氏道春来り。道円は何をかみ給ふと有しに、いや漢書をみると答へ給ふに、道春、さてその文字一まいのうち、いくつほど覚え給はぬ文字有やと問給ふに、五六字ばかりおぼえずと聞えければ、われは二三字より外しらぬ字はなしと申させけりとぞ。

中国の詩話や文話に似たようなこのエピソードは、恐らく惟中の創作と思われる。羅山と活所の二人を第一級の知識人として登場させ、しかも僅かながら活所より羅山の方がさらに博識であることをほめかす話の内容から、惟中における羅山への傾倒が窺える。同じ『一時隨筆』の中に「つれづれの抄野槌といふ事」も書かれているが、

つれづれ草の抄を林氏道春編集して野槌と名づく。もと野槌といふは神の名也。神代の卷四^四神出生の下に、生^{ツムテ}草^{クサ}祖^{ノミヤ}草^{ノミヤ}野^{ノミヤ}姫^{ノミヤ}一、亦名^{ノミヤ}二野^{ノミヤ}槌^{ノミヤ}一。いま此抄は、つれづれ草のためには、おやたる抄なれば、野つちと名付し也。こゝろふかき抄の名也。

ここでもやはり羅山の著作に対し、惟中は賛辞を惜しまなかった。『徒然草』といえは惟中自身も講釈をしていたし、注釈書も出版している。『野槌』命名の所以を明かしたこの話は、惟中の『徒然草』注釈から生れた副産物の一つと考えられよう。とすれば、惟中を羅山のよき理解者と看做すこともできる。

すでに指摘されたことであるが、惟中の言うところによれば、彼は若い時江戸で菊池耕斎と檜川半融軒に従って儒を学んだことがあるという^⑪。半融軒については伝記が未詳のため、後考を俟つしかないが、耕斎は和刻本『円機活法』(明暦二年(一六五六)刊)や『陶淵明全集』(明暦三年(一六五七)刊)など、多くの漢籍に訓点を施した儒者として有名である。

耕斎の子武雅の撰による「先考耕斎先生略伝」(内閣文庫蔵『耕斎先生全集』所収)では、少年耕斎の経歴について先師菅得庵の没後、「寛永十年癸酉、十有六歳。初めて江都に至る。羅山林先生の門に遊学す。明年罷て帰る」(原文)と記されている。僅か一年間の遊学ではあるが、耕斎は実際に羅山の訶咳に接した門生の一人である。その耕斎より教えを受けたことがあるという惟中の証言を信じてよいなら、^⑫彼は羅山の孫弟子にも数えられることになる。

三

かような関係があったためであろうか、直門の師承ではないが、惟中は自著の随所において林家の学を受け継ぐ姿勢を示している。『徒然草』関連で言えば、彼の著わした『徒然草直解』(貞享二年(一六八五)刊)、『真字徒然草』(元禄二年(一六八九)刊)には、羅山の『野槌』は勿論のこと、『羅山林先生文集』、『本朝神社考』、『多識編』、林鷲峰の『日本国事跡考』、林読耕斎の『本朝遷史』、林梅洞の『史館茗話』等、林家三代の著作が揃って引かれてい

る。

惟中と同時代の人で、同じ俳諧師の山岡元隣にも『鉄槌』（寛文九年（一六六九）刊）という、『徒然草』の注釈書がある。同書の執筆にあたり、元隣も羅山の『野槌』を利用したことは言うまでもないが、しかし羅山の孫梅洞までの林家三代の著述を網羅的に引用する特徴は、『鉄槌』には見られない。それらと比べて、惟中の引用ぶりは、近世文学全般への林家の影響¹⁴の大きさをさし引いても、ひとときわ突出していると言わなければならぬ。

一方、惟中の『和漢朗詠集諺解』（元禄六年（一六九三）刊）は、北村季吟『和漢朗詠集註』（寛文十一年（一六七二）刊）につぐ、近世前期において二番目に上梓された朗詠集の注釈書であるが、こちらの惟中の注もやはり林家の著述に負うところが大きい。中でも特に目立つのは、同書における『史館茗話』の引用である。その数は頭注と傍注を合わせて三十六箇所にもおよび、全部で百条ある茗話のうち、実に三分の一以上はそのまま朗詠集の注釈として惟中に利用されている（次頁一覽表参照）。『和漢朗詠集諺解』の執筆中、惟中が常に『史館茗話』を参照していたことは歴然である。管見の限り、古典の注釈にかくも林家の著述を前面に持ち出してくるケースは、外に類例を見ない。惟中の意図するところは那邊にあるのか、『和漢朗詠集諺解』における『史館茗話』の引用を少し具体的に検討してみよう。

梅洞著・鷲峰補『史館茗話』（寛文八年（一六六八）刊）は、平安時代の漢詩人にまつわる逸聞を集めた漢文の随筆であるが、例えば『和漢朗詠集諺解』の中で、二回も引用された『史館茗話』の第九条（梅洞執筆）は次の通りである¹⁵。

昔相在^ル二貶所^ニ三年。行住坐臥不^ス過^キ一室^ニ。鬱鬱^{トシテ}送^レ日^ヲ。都府樓在^リレ眼^ニ。不^ス能^ハ二往登^ル一焉^ト。觀音寺在^リ近^キ。

一覽表 『和漢朗詠集諺解』における『史館茗話』の引用

『和漢朗詠集諺解』		『史館茗話』
卷一	藤原公任	傍注 第八十三条
	紀納言	頭注 第十二条
	紀齊名	頭注 第三十六条
	田達音	頭注 第四十六条
卷二	菅三品	傍注 第二十四条
	江以言	頭注 第四十一条
		頭注 第四十二条
	後江相公	頭注 第十七条
	橘正通	頭注 第七十二条
	前中書王兼明	頭注 第七十条
	後中書王具平親王	頭注 第七十一条
	菅三品	傍注 第五十六条
	源英明	頭注 第六十一条
	清慎公	傍注 第六十九条
	源英明	頭注 第二十五条
	源爲憲	頭注 第三十八条
	菅輔昭	頭注 第四十二条
	菅淳茂	頭注 第十四条
源順	傍注 第三十一条	
卷三	三善清行	傍注 第四十九条
	江以言	傍注 第三十七条
	前中書王	傍注 第七十条
	江以言	傍注 第三十四条
卷五	直幹	傍注 第六十二条
卷六	都良香	傍注 第四十四条
卷七	白	頭注 第九条
	都良香	頭注 第五条
卷八	菅	頭注 第九条
	後江相公	傍注 第十八条
	菅庶幾	傍注 第二十七条
	江相公	傍注 第二十八条
卷九	菅三品	傍注 第五十五条
	江匡衡	頭注 第三十三条
卷十	菅篤茂	傍注 第四十三条
	橘正通	傍注 第六十八条
	橘侯草	傍注 第六十七条

不^ス能^ハ往^テ遊^フコト^ト。焉^ヲ。偶^ク得^{タリ}ニ一^ヲ聯^ヲ。曰^ク、都^ノ府^ノ樓^ノ纒^ハ纒^ニ看^ミ瓦^ノ色^ヲ。一[、]觀^ノ音^ノ寺^ハ只^ク聽^ク鐘^ノ聲^ヲ。一^{。自^ミ謂^ハ似^クニ^ニ樂^カ天^ニ詩^ト也[。]}

道真の名作「不出門」についてのエピソードが紹介されているが、梅洞が「自ら謂へらく、楽天が詩に似たり」といったところで筆を擱くのは、読者を考えさせる余韻を残す書き方である。「都府楼」云々の一聯が惟中の俳諧にも利用されたことは、先述の通りであるが、『史館茗話』のこの条は道真と楽天の詩句の頭注として、『和漢朗詠集諺

解』の卷七と卷八に繰り返し登場したのである。注釈の対象となったのは、左記の二箇所である。⁽¹⁶⁾

遺愛寺鐘欝^{ノハテ}枕聴^{ヲキ}香爐峰雪撥^{ノハテ}簾看^{ヲル} 白 (卷七・一丁表)

都府樓^{ニハニ}纒看^{ニハニ}瓦色^{ノヲ} 観音寺^{ニハ}只聴^ク鐘聲^{ノヲ} 菅 (卷八・三丁表)

惟中は『史館茗話』の話を借りて、道真の句と居易の詩との関係を示唆しようと考えたのであろう。

話がここまでで終われば、惟中の注釈は十分賞賛に値すると言ってもよいが、しかし彼もよく利用したと思われる『和漢朗詠集註』の永濟注によれば、道真「不出門」のこの一聯は「彼居易ノ遺愛寺ノ詩ニハ猶マサリザマニ作リタマヘリトナン。時ノ博士ドモ言ケルト。世繼^{ヨツギ}見エタリ⁽¹⁷⁾」という。『大鏡』の時平伝をひもとけば、確かに該当の記事⁽¹⁸⁾が存在する。

都府樓ハ纒ニ瓦ノ色ヲ看ル 観音寺ハ只鐘ノ聲ヲ聴ク

これは、文集の、白居易の「遺愛寺鐘欝枕聴、香炉峰雪撥簾看」といふ詩に、まささまに作らしめたまへりところ、昔の博士ども申しけれ。(後略)

さらに言えば、類話は『江談抄』第四⁽¹⁹⁾にも見える。

都府楼纒看瓦色 観音寺只聴鐘声

菅家

此詩於鎮府不出門胸句也。其時儒者云、此詩、文集香炉峰雪撥簾看之句にはまささまに被作云々。

要するに、『史館茗話』の第九条でさえ『大鏡』や『江談抄』の記述に基づいて潤色したものである。⁽²⁰⁾ ここにおいて『史館茗話』を引用しても、先行する『和漢朗詠集註』の指摘を超えた、新しい結論を導き出すことはできない。それなのに、当然知っていたはずの『大鏡』などの記述に触れずに、ひたすら当代の『史館茗話』を抄出した惟中の行動は、いささか奇妙であると言わざるを得ない。そこには、権威ある林家の著作を自分の注釈書にちりばめることによって、外見上だけでも今までの注釈とは異なる、独自の個性と博識多聞の自画像を世間に印象付けようとする彼の思惑が見え隠れしている。

後の俳人、本草趣味家としても名の知られた寺町白庵は『歌囊井蛙談』(宝暦十一年(一七六一)刊)の巻中で、『和漢朗詠集』所収藤原実頼の詩句や、それに関連する『史館茗話』第六十九条を引いて款冬についての考証を行つたが、巻末の最後の一条において、白庵はこのように述べている。⁽²¹⁾

○此説^ハ和漢朗詠諺解に載る處なり。此書は攝州浪速産岡西惟中老叟か著述する處。和歌は烏丸資慶卿、同光雄卿兩代の門人。連歌は西山宗因か弟子なり。滑稽は其餘慶なり。今の輕薄無識の徒か翫ふ詠諧にはあらず。

こうして見ると、古典注釈を含む惟中の自己アピールは、見事に功を奏していると言えよう。なお、百庵編『華葉集』(宝暦七年(一七五七)刊)の中にも『史館茗話』への言及(『和漢朗詠集諺解』の引用)があり、⁽²²⁾ 惟中の『和漢朗詠集諺解』は、結果として林家の著述を広く江湖に知らしめる役割も果たしたのである。

四

古典の注釈だけでなく、惟中の随筆にも和漢にわたる林家の学問、或いは林家経由の中国詩学の知識をそのまま受け売りする箇所が多く、出典を明記せず、剽窃と思われる場合すらある。『続無名抄』巻上に「長明海道記の説の事」が書かれている。

賀茂の長明か海道の記、世^{コソツテ}挙て長明か作也とおもふは、いふかしき事也。夫木抄の中、ふしの白雲の詠、かれこれ数首、皆源の光行か東行の詠とす。後の哥人考へみるへし。

この件について、幸島宗意『倭板書籍考』（元禄十五年（一七〇二）刊）巻四の『海道記』の項目では、「長明ノ作ト云傳ヘタリ。不審ナリ。源光行作タルヘシト訓。羅山文集ニ見ヘタリ」と、はっきり羅山の説として紹介している。それを手がかりに羅山の文集を調べると、巻五十五・「題跋五」より「鴨長明海道記跋」という文章を見出すことができる。⁽²⁵⁾

此記世稱鴨長明所作也。按夫木抄載此記中之富士白雲等倭歌數首。皆以爲源光行東行之詠。然則世之所稱誤矣。

羅山の跋文を先の隨筆と読み比べれば、惟中はただ羅山の文章を読み下しただけであることが分かる。文末において、羅山が「世の称する所誤れり」と断定したのに対し、惟中は「後の哥人考へみるべし」と少し口調を和らげた。両者の違いはこの部分のみである。

勿論、諸芸に秀でた教養人である惟中の隨筆が、すべて創見のないものとは言えない。林家の学識をいくぶん敷衍し、自分なりの意見を加え、興味深い内容に仕上げた条も少なくない。例えば『羅山林先生文集』巻七十五・「隨筆十一」には、中国の文人の「癖」に関する話がある。

李涉^{フク}茸^レ居^{ウニ}詩、從來^{シテ}愛^レ物^ウ多^ク成^レ癖、辛苦^{スハ}移^レ家^ヲ爲^ニ竹林^一。七賢王子^カ猷^カ之後、愛^{スル}竹^ヲ者^モ涉^カ乎。所謂^ノ三年^ノ受用^ノ多^ク裁^ル竹^ノ之^ヲ謂^イ歟。杜^カ元凱^カ左傳^ノ癖、王^カ武子^カ馬癖、和^カ嶠^カ錢癖、王^カ福時^カ譽兒癖、黃魯直^カ香癖、今^カ加^フ李^カ涉^カ竹癖^一。此外^ノ可^シ多^カ。

羅山は晩唐詩人李涉の「茸居」（『聯珠詩格』巻五・「用從來字格」所収）から、杜預の左伝癖、王済の馬癖、和嶠の錢癖（以上は『晋書』・「杜預伝」、王福時の誉兒癖（『新唐書』・「王勃伝」、黄庭堅の香癖（『山谷詩集』巻五・「賈天錫惠宝薰乞詩予以兵衛森画戟燕寝寢凝清香十字作詩報之」其五）を連鎖的に思い出し、李涉の愛竹趣味を竹癖と評した。言ってみれば、まさに歴代の詩文にまつわる「癖」尽しである。それを踏まえた惟中の隨筆は、『統無名抄』巻上に記されている。

人ことに癖といふものあり。慈鎮和尚の哥に、人毎にひとつのくせは有ものをわれにはゆるせしきしまの道。是

に依ておもふに、杜元凱トカイニ左傳癖ソクセアリ。王武子馬癖フニノアリ。和嶠カウニ錢癖シノアリ。王福時ジホムル譽レ兒癖コヲ。黃魯直ロシキニ香癖ノクセアリ。李涉セシニ竹癖ノアリ。
余おもふに、盲目にすねたる癖あり。名人に異風イフウの癖有。俳諧師ハイキに吟声インシ癖あり。

「癖」という共通項をキーワードに、慈鎮の和歌、唐土の故事、自己の随感が滞りなく綴られていて、短いながら惟中の技量が十分に窺える一条である。慈鎮の歌を見て直ちに羅山の随筆が想起できるのは、さすが「記誦詞章の学」に長じた惟中と思わざるを得ない。同じ『統無名抄』の巻中には、逆に漢詩のことから和歌と連歌に思いを馳せた場面も見られる。

眉山ノ早行詩ノ、馬上ニ續ツク残夢、不知ニ朝日昇ノ朝日昇ノホルコトヲ。又唐王駕句、馬上ニ續ク残夢、馬嘶イハツテ時復驚ニニマタクク26。上の五字同し。東坡よだれをねぶるのとおとこにあらず。名譽の事也。哥にも中宮権太夫、すはのうみの氷の上のかよひちはけさふく風に跡たえにけり。堀河院百首頭仲哥、すはの海の氷の上のかよひちは神のわたりて解る也けり。上の句相違なきの上、詠する意趣またおなし。六百番哥合の判に百首のうち殊に秀逸にあらずは、さがりがたく取事ありと也。王駕カ東坡か下の句の善悪いつれならむ。この哥の下の句またいつれかまさらむ。連哥の事、前句たにかはれは、おなし一句のしたてを付る事勿論難する事なし。

ここにおいても、惟中は漢詩、和歌、連歌のことを縦横に語り、自己の本領を余すところなく發揮しているのである。簡単に内容を要約すれば、漢詩も和歌も上の句は全く同じで、下の句はどれが優れたか決めかねるケースがあるという主旨の話であるが、赤羽学氏は早くもこの条に注目され、「馬上に残夢を続ぐ」という表現の類似を論じた惟

中の指摘は、清の乾隆帝時代の学者、四庫全書の編纂を取り仕切った紀昀（字は曉嵐）よりも早かったという。⁽²⁷⁾
しかし、『羅山林先生文集』卷三十六・「問对六」にも「馬上統夢」の一篇がある。⁽²⁸⁾

眉山早行詩云、馬上續殘夢、不_レ知朝日昇。始驚此起句甚奇。其後見唐詩、而王駕既有此句。云、馬上續殘夢、馬嘶時復驚。其形_ニ容曉行_ニ爲_レ切矣。坡老非下_ニ舐_ニ人唾涎_ニ者_上。偶然相同歟。若步_ニ驟_ニ之_ニ歟。下_ノ孰_{カレ}其_甲乙_{ナルヤ}哉。

内容といい、話の構造といい、惟中の隨筆が羅山の文章を踏まえていることは明らかである。そして何より、両方も「馬上統夢」句の鼻祖を王駕としたところが、揺るぎない証拠となる。赤羽氏も指摘されたように、最初にそれを作ったのは王駕ではなく、劉駕という晩唐の詩人である。しかし、それは惟中の誤りというより、実は羅山の記憶違いであって、惟中は羅山の間違いを気付かずに、詩句を孫引きしたためにそのような結果になったのであろう。

王駕と劉駕はほぼ同時代に生きた詩人であり、二人とも唐代詩人の伝記集である『唐才子伝』に収録された人物である。内閣文庫には羅山手沢の『唐才子伝』（別05110002）が現存しており、同書の卷七と卷九には、それぞれ劉駕と王駕の小伝が載せられている。時代も同じで、名前も近似しているし、同じ書物から読んだ記憶もあって、さすがの羅山も二人のことを混同してしまったようである。

ところで、蘇詩と劉詩の雷同について、中国では羅山以前にすでに複数の詩話によって指摘されていた。いずれも明人の著述であるが、楊慎『昇庵詩話』卷十、胡応麟『芸林学山』卷一、王世貞『芸苑卮言』卷四にそれぞれ関連の記述が確認できる。該当する箇所を和刻本『芸苑卮言』（延享元年（一七四四）刊）より引用する。⁽²⁹⁾

劉駕馬上續^ク殘夢^一。境頗佳^{ナリ}。下云、馬嘶而後驚^ク。遂不^レ成^レ語矣^一。蘇子瞻用^フ其語^一。下云、不^レ知^二朝日昇^一。亦未^レ是^一。至^三復改爲^二瘦馬兀殘夢^一、愈墜^三惡道^一。

羅山は恐らくこれら中国の詩話から刺激を受けて、「馬上統夢」を書いたのだろう。すると惟中の隨筆は、羅山の文集を通して受容された中国の詩学を基にして、そこに和歌や連歌の知見をつぎこみ、最終的には一種の和漢比較文學論として完成させたものではなからうか。ちなみに、『白水郎子紀行』卷二に次のような一節もある。

小奈の縣は一ツ柳親衛校尉の領地也。家臣喜多川一言雅士のもとに行て、一日饗應の有さまことに丁寧なりき。

棟梁の姿ならむ小奈の秋よ種

青々 一寸松、中有^二棟梁姿^一と東坡が作りし涎をすゝりたるなるべし。

これもまた古典を奪胎し、地名の小松と棟梁臣である主人への贅辞を掛けて上手く言い得た、惟中らしい一句であるが、自分が蘇軾の詩を踏まえて発句を作ることを「東坡の涎をすする」と表現したところは、或いは無意識のうちに羅山の文章を思い出したのかも知れない。

惟中は術学的筆癖と露骨な自己宣伝により、多くの論敵を作ったことは周知の通りである。度重なる熾烈な論戦の中で、いわば最新鋭の武器として彼に担ぎ出されたのは、林家の著作である。惟中著『しぶ団返答』（延宝三年（一六七五）刊）には、次のような記述がある。⁽³²⁾

近代の博士林氏（ハカセリ）が一代の詩文あつめて『羅山文集』（ラサンブンシウ）と名づく。それにも「脇刀一ヶ」（ハコトウイツコ）と書たり。一箇とはひとつといふ事なり。さしものものしりのか、れし子細こそあるらめ。何はしらぬ、くるしうない事さうな。「箇」の字、何時も助語にてこ、ろはない字ぞ。よくく、学文のぞいてしらるべし。

西山宗因『蚊柱百句』（延宝二年（一六七四）刊）所収の「札もなき脇指ひとつ持来り」に対し、去法師なる人物は『しぶ団』（延宝二年刊）を書いて、「脇指ひとつとは、耳に立て聞え侍る」と難じた。惟中がそれを論駁し、宗因の句を擁護しようとするのは、右に掲げた部分である。惟中にとって『羅山文集』は論敵を一蹴する伝家の宝刀である。これによって思うに、彼が羅山の文集を読んで「馬上続夢」の一篇に注目したのも故なしとしない。

惟中は延宝八年（一六八〇）二月刊『俳諧破邪顕正返答』の巻末に自作の「皮肉百韻」を付したが、その中に「あそこさまへ雲の衣をふんぬぎて／延喜の帝慈悲の雨ふらす」と詠んだところがある。同年三月刊『俳諧破邪顕正返答之評判』（難波津散人著）が、「この句、正章がよだねぬぶりたり」と酷評したので、同三月下旬刊『俳諧破邪顕正評

判之返答』において、惟中は『萃白集』に『源氏』の歌入たり、そして「小野の篁が詩、白楽天が詩に同じく作合せし事、三首まで有」ることを取り上げ、「されどもよだれをねぶりし人とはいはず。還て名誉の至とす」と反論した。しかし、その甲斐もなく、同五月刊『備前海月』（難波津散人著）に再駁される羽目になった。そんな中で延宝八年（一六八〇）八月、惟中の随筆『統無名抄』が上梓された。

羅山經由の、少し不正確な情報の入った中国詩学の知識が惟中に刺激を与えたことは、既述の通りであるが、それとは別に「坡老人の唾涎を舐る者に非ず」という、「馬上統夢」に記された羅山の評言を読んだ時、惟中は我が事に引き合わせ、大いに喜んだのではないか。蘇詩と劉（王）詩における表現上の類似は、「名誉の事也」という確信を、惟中は羅山の文章から得ることができたのである。

そこから議論を広め、和歌の場合も「百首のうち殊に秀逸にあらずば、さりがたく取事」が有り得るので、「連哥の事、前句たにかはれば、おなし一句のしたてを付る事勿論難する事なし」という結論に至ったのである。つまり彼が言下に証明したいのは、やはり「皮肉百韻」における自作の正当性であり、自分は東坡と同じように、「よだれをねぶるのおとこ」ではなかったということであろう。

一日兀^{ゴツ}ニ坐^{ザシ}一室^{シツ}ニ、考^{カウ}索^{サク}群書^{クンショ}ヲ。讀^{テハ}レ之^レ養^ヤ閑^{ケン}、詠^{シテス}レ之^レ厭^{イイトフ}塵^{チン}。亦不^{スヤ}レ説^{ゴロコハシカラ}乎。

『統無名抄』自序の一節である。「養閑」とか、「厭塵」とか、まるで物外の逸士のような口吻であったが、しかし彼は俗世の名声を気にせずにはいられなかった。閑中の一興である随筆を書いていた時すらも、惟中の内心は、実は平穩ではなかった。⁽³⁵⁾

おわりに

和漢にわたる惟中の教養の基盤には、林家の学問が一本の柱として存在し、そのような影響関係の究明は惟中という人物への理解にも繋がる事が確認できた。惟中ほど林家の学恩を蒙った俳諧師はいない。が、「元禄文壇の典型的人物」であるがゆえに、惟中における林家の学問の摂取も、孤立した現象とは思えない。

同時代の俳諧師であった芭蕉の例で言えば、羅山が著した啓蒙的な仮名抄『巨言抄』・『童観抄』は、『おくのほそ道』にも利用され、俳文創作の参考として、芭蕉の机上には羅山の『野槌』が置かれた可能性も高い。⁽³⁷⁾芭蕉が林鶯峰編『本朝一人一首』を真剣に読んでいたことは、『嵯峨日記』の記述に徴しても明らかである。漢文学だけでなく、和学史上の林家の役割も注目を浴びつつある中、今後は俳文学へ与えた林家の影響について、さらに広範囲の検討が必要なのではないかと考えている。

〔注〕

- (1) 上野洋三「岡西惟中―元禄文壇の典型的人物」、『解釈と鑑賞』、二〇〇〇年五月。
- (2) 引用は愛媛大学文学資料集4『白水郎子紀行・其日くさ』（愛媛大学国語国文学研究室、一九九二年）によるが、善通寺蔵本（国文学研究資料館MF）をも参照し、私に句読点を補った。傍線等は稿者による（以下同）。
- (3) 『白水郎子紀行』巻二の記述によれば、善通寺住職の宥謙は惟中に詩歌を贈り、彼のことを「俳諧宗匠一時軒」と呼び、惟中自身も発句の中で今回の旅を「俳諧行脚」と称している。

(4) 「魁本大字諸儒箋解古文眞寶」の「儒」に対する注釈（寛文三年刊林羅山解・鶴飼石斎補『古文眞宝後集諺解大成』巻一）。

(5) 引用は近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従・古俳諧編47』（勉誠社、一九七六年）による。『日本随筆大成』（日本随筆大成刊行会、一九二八年）所収の『消閑雜記』をも参照し、私に句読点を補った。

(6) 引用は天理図書館綿屋文庫編『俳書叢刊』（復刻版）（臨川書店、一九八八年）第二期による。私に句読点を補った。

(7) 惟中は『俳諧破邪顕正評判之返答』（延宝八年刊）の中でも、「故事も米歴もそのまゝ、句作りては自分の作聞えず。もとの事をふくみてそれをあらぬ事にしなすを俳諧とす」と言い、また古典を踏まえた句の評価について、「すべて点者の点するにも、故事をふまへ古きものがたりの根ざしある句は、平句のあぶなきよりも、かならず点かけ長点懸る事大事の秘密也と、貞徳の伝受また連歌師のならひにもする事也」と強調している。

(8) 山岡元隣『俳諧小式』や池田是誰『初本結』にも、俳諧における古典教養の重要性を説く記述が見られることは、廣木一人氏に指摘されている（座談会「十七世紀の文学」、『文学』、二〇一〇年五月）。

(9) 同じ『玉櫛笥』からの受け売りとして、『俳諧破邪顕正返答』（延宝八年刊）にある次の一節を挙げることでもきる。「詩に賈嶋は瘦たり、孟浩然は寒しといひ、仏法にも多問の阿難、神通の目連とのべ、儒にも徳行には顔淵・閔子騫、文学には子遊・子夏と顕し、和歌にも四道十鉢といふ事あり」。

(10) 引用は『日本随筆大成』（日本随筆大成刊行会、一九二八年）による。

(11) 上野洋三「岡西惟中年譜稿」（『国語国文』第三十七卷第十一号、一九六八年十一月）。関係記事は『白水郎子紀行』巻一と『統無名抄』巻中・「ほりかねの井」に見える。

(12) 半融軒が田村建頭（陸奥岩沼藩二代藩主、のち一関藩初代藩主）の学問の師でもあることは、一関市立図書館蔵『御年譜俗稿』によって知ることができる（渡辺憲司『近世大名文芸圈研究』、八木書店、一九九七年）。

(13) 「岡西惟中年譜稿」の指摘通り、惟中の言うことは『先哲叢談続編』所収の耕斎伝から何う耕斎の経歴と齟齬する部分がある。上野氏は「どちらとも決めかねる」と論じたが、より信憑性の高い「先考耕斎先生略伝」を参照しても、やはり惟中の証言には何らかの記憶違いがあったと思われる。

(14) 中でも羅山の著述が仮名草子、浮世草子、浄瑠璃の各ジャンルに与えた影響について、神谷勝広氏の一連の論考（『近世文学と和製類書』、若草書房、一九九九年）がある。

(15) 引用は南摩文庫本（国文学研究資料館紙焼写真）による。私に句読点を補った。

(16) 引用は飯田市立図書館本（国文学研究資料館MF）による。

(17) 引用は『北村季吟古註釈集成』（新典社、一九七九年）による。

(18) 引用は橋健二ほか校注・訳『大鏡』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九六年）による。

(19) 引用は後藤昭雄ほか校注『江談抄・中外抄・富家語』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九七年）による。

(20) 『日本古典文学大辞典』・『史館茗話』項（日野龍夫解説）によると、「材料は『江談抄』『古事談』などから取る」。

(21) 百庵の『歌囊井蛙談』について、中野三敏『江戸狂者傳』（中央公論新社、二〇〇七年）第三「百庵簡傲」が詳しい。

(22) 引用は国文学研究資料館本による。私に句読点を補った。

(23) 『華葉集』に「古今著聞集、史館茗話の両説はとまれかくまれ、公任卿の三芸に達したるは大井川の大なると

いふべし」(引用は雅俗の会編『雅俗文叢中野三敏先生古稀記念資料集』(汲古書院、二〇〇五年)所収の関澤智子氏の翻刻による。ただし、同翻刻の「古は著聞集」を「古今著聞集」と改めた)とあるところは、明らかに『和漢朗詠集諺解』巻一に記された、「古今著聞集、史館茗話ノ趣キニシテ大同少異也。宜ク考合ヘス」という惟中の所説を踏まえている。

(24) 引用は長澤規矩也・阿部隆一編『日本書目大成』(汲古書院、一九七九年)第三巻による。私に句読点を補った。

(25) 引用は京都史蹟会編『羅山先生文集』(平安考古学会、一九一八年)による。東洋文庫本(国文学研究資料館紙焼写真)をも参照し、一部の誤植を改め、私に句読点を補った。

(26) それぞれ蘇軾「太白山下早行至横渠書崇壽院壁」と劉駕「早行」の首聯である。

(27) 赤羽学「芭蕉における伝統の受容と体験と表現——『野晒紀行』の小夜の中山の条の成立」(井本農一博士古稀記念『俳文芸の研究』、角川書店、一九八三年)。氏は「劉駕と蘇東坡の同じ『早行』の詩の首句の偶合を紀昀より早く指摘した人が日本にいる。それは、岡西惟中の『統無名抄』(中略)である。(中略)『眉山』は「太白山下」、『王駕』は『劉駕』のそれぞれ誤りであるが、趣旨は紀昀と同じことを言っている」と論じているが、まず「眉山」は東坡をさすことを指摘しておきたい。蘇軾は四川眉山の人である。

(28) 羅山の文集に「馬上統夢」の一篇があることは、池澤一郎「蘇軾の『残夢』と芭蕉の『残夢』——林家詩学の一面」(『江戸風雅』、二〇〇九年十一月)による。該当の文章は児輩の学力をチェックするための質問であり、それに対する読耕斎の回答は『読耕先生外集』巻四に収録されている。

(29) むろん、羅山が実際に読んだのは白文の唐本やその写本であろう。紅葉山文庫の『御文庫目録』によれば、

【芸苑卮言】は正保三年に入庫しているのである。中村幸彦「石川文山の詩論」(『中村幸彦著述集』第一巻、中央公論社、一九八二年)参照。

(30) 『蘇東坡全集』巻八・「除夜大雪留澠州元日早晴遂行中途雪複作」に「東風吹宿酒、瘦馬兀殘夢」の一聯がある。

(31) 『蘇東坡全集』巻十六・「故李承之待制六丈挽詞」の首聯。

(32) 本条を含め、以下の俳書の引用は、飯田正一ほか校注『談林俳諧集』(『古典俳文学大系』集英社、一九七一年)による。

(33) 羅山の文集に、完全に一致した表現は見当たらない。或いは、巻十二・「外国書上」・「呈占城国主」に見える「脇刀壹柄」を指すか。

(34) 『談林俳諧集』の注釈によれば、『正章千句』第七「秋螢」(初一―二)に、「寒き夜もふんぬげば身に夏ごろも／延喜の帝慈悲のふかさよ」とある。

(35) 惟中の現実的な欲望や、官途への野心は、夙に上野洋三氏によって論じられている(『岡西惟中論』、『文学』、一九七〇年五月)。

(36) 広田二郎「芭蕉の芸術―その展開と背景」、有精堂、一九七九年。

(37) 広田二郎「芭蕉と古典―元禄時代」、明治書院、一九八七年。神谷勝広「芭蕉俳文と『徒然草』注釈書」、『連歌俳諧研究』、一九九七年三月。

(38) 川平敏文「和学史上の林羅山―『野槌』論」、『文学』、二〇一〇年五月。

〔付記〕

本稿は平成二十二年度俳文学会第六十二回全国大会（於四国大学）における口頭発表に基づく。発表の席上およびその前後にご教示、ご鞭撻を賜った諸先生方に深謝申し上げます。執筆にあたり、財団法人日本科学協会平成二十三年度笹川科学研究助成よりご支援いただいた。記して感謝の意を表する。